

近畿大学工学部 教職課程年報

2020

Vol. 7

■ 論文 [実践研究]

高山 智行, 小西 和哉: 教育実習体験が教師職志望に及ぼす影響 3

■ 体験記

合格体験記 大木 雪 17

介護等体験報告 大西 翔 / 下森 萌 / 清藤 亮太 19

教育実習報告 狭間 美沙 / 大村 興平 / 苜屋田 美穂 22

■ 資料

1. 令和元年度教職課程行事報告 29

2. 令和元年度教職課程受講者数 30

3. 令和元年度教育実習・介護等体験参加者数 31

4. 令和元年度免許取得者数・教員就職者数 32

■ お知らせ

教職ラボ同好会(近畿大学工学部教職サークル) 35

論文 [実践研究]

教育実習体験が教師職志望に及ぼす影響^{注)}

高山 智行^{†1} 小西 和哉^{†2}

The Impact of Teaching Practice Experience on Teaching Career Aspirations

Tomoyuki TAKAYAMA Kazuya KONISHI

教育実習は、教師職志望の学生にとって貴重な現場体験の機会であり、その後の進路選択に大きく関わってくる。本稿では、教育実習の前後に学生に対して行った教師職志望についての自由記述アンケートの分析から、実習体験の内容が実習後の志望の変更や教職への意識の変化にどのような関わりをもつか検討した。その結果、教師職のやりがいや生徒との関わりの楽しさ、実習先の教員への尊敬・憧れなどは教師職志望に肯定的な影響を及ぼし、教員の責任の重さや多忙感、自らの教員としての能力への自信のなさ、教育現場への不信感などが教師職志望を低下させることが示された。自らの能力適性を適正に判断して志望を断念することは、多くの学生が述べる教育実習参加の目的の一つに沿ったものといえるが、限られた経験から抱く、教育現場や自身へのネガティブな思い込みへの対応については、教育実習の前後の指導の中での取り組みを検討すべき課題であろう。

1. はじめに

我が国の教員養成に関して、これまで、「必要単位数が法律に規定されており、新たな教育課題が生じても速やかな単位数の変更が困難である」、「学校現場の状況の変化や教育を巡る環境の変化に対応した教職課程になっていない」、「大学教員の研究的関心に偏った授業が展開される傾向があり、教員として必要な研修が行われていない」などの課題が指摘されていた（文部科学省，2018）。平成26年7月、当時の下村博文文部科学大臣から「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について」諮問され、平成27年12月21日、中央教育審議会は、「教職課程の科目区分の大括り化」、「新たな教育課題等への対応するための履修内容の充実」、「教職課程コアカリキュラムの作成」を盛りこんだ「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」を答申した。それを受けて、平成28年11月に教育職員免許法、翌平成29年11月に教育職員免許法施行規則が改正され、平成30年度から全大学の教職課程の審査・認定が始まった。審査の結果、認定を受けた1,283校の大学等の計19,416課程で、平成31年4月1日から新たな教職課程が開始されている（文部科学省，2018）。

わが国の現行の教員養成は、「大学における教員養成」の原則と、「開放制の教員養成」の原則という2つの原則のもとで展開されている。前者は、教員養成教育を、戦前のような師

^{†1} 近畿大学工学部教育推進センター

Center for the Advancement of Higher Education
Faculty of Engineering, Kindai University

^{†2} 近畿大学工学部情報学科 2019年度卒業

Graduated in 2019, Department of Informatics,
Faculty of Engineering, Kindai University

範学校や高等師範学校等の教員養成を目的とする専門の学校ではなく、大学で行い、幅広い視野と高度の専門的知識・技能を兼ね備えた多様な人材を広く教育界に求められるようにしたということである。また後者は、国立・公立・私立のいずれの大学でも、教員免許状取得に必要な単位に係る科目を開設して学生に履修させ、制度上等しく教員養成に携わることができるようにしたことである（中央教育審議会，2006）。

本工学部の教職課程も、開放制の原則のもと、これまで多くの教員を養成し、学校現場に送り出してきた。今回の審査でも再課程認定を受け、平成31年4月1日からは新たな基準での教職課程が始まっている。現在、工学部で取得可能な教員免許状を表1に示す（近畿大学工学部，2019）。工学部の教育目標の一つは「技術者としての専門的能力の涵養」であるが、教職課程を受講する学生の中には、毎年度一定の割合で、教員免許の取得をそもそもの目的として入学してきた者もいる。また、もともと教師職志望ではなかったものの、資格取得の一つとして教職課程を受講する中で、教師職を進路選択肢の一つとして意識するようになる学生もいる。教育実習前の段階での教師職志望は、教職課程受講者の約半数となる

表1 工学部で取得できる教員免許状および免許教科の種類

学科	免許取得コース	免許状の種類	教科	備考
化学生命工学科	理科コース	中学校教諭第一種免許状 高等学校教諭第一種免許状	理科	いずれか1 コースのみ
	技術・工業コース	中学校教諭第一種免許状 高等学校教諭第一種免許状	技術 工業	
機械工学科	技術・工業コース	中学校教諭第一種免許状	技術	
		高等学校教諭第一種免許状	工業	
情報学科	技術・工業コース	中学校教諭第一種免許状 高等学校教諭第一種免許状	技術 工業	いずれか1 コースのみ
	情報コース	高等学校教諭第一種免許状	情報	
建築学科	技術・工業コース	中学校教諭第一種免許状	技術	
		高等学校教諭第一種免許状	工業	
電子情報工学科	数学コース	中学校教諭第一種免許状 高等学校教諭第一種免許状	数学	いずれか1 コースのみ
	技術・工業コース	中学校教諭第一種免許状	技術	
		高等学校教諭第一種免許状	工業	
情報コース	高等学校教諭第一種免許状	情報		
ロボティクス学科	数学コース	中学校教諭第一種免許状 高等学校教諭第一種免許状	数学	いずれか1 コースのみ
	技術・工業コース	中学校教諭第一種免許状	技術	
高等学校教諭第一種免許状		工業		

(高山, 2014). 教師職を進路選択肢として意識する学生が増えることは、教職課程での指導の成果と言えるであろう。

他方、教員免許状取得の大きな関門であるはずの教育実習に行こうとする学生の中には、教師職に就く意思がないか、教師職志望が明確でないという者もいる。有馬 (2017) は、「教職に就くことはなくとも、課程を履修する中で教職の意義を理解し、教育に対するより良い理解者となる社会人を育成することは大きな意義がある」ものの、「教員免許状を数ある資格の一つとして考えて、取得可能であるならば取得しておこうと安易に教職課程を履修する」ことは、「学校現場における教職員や児童生徒への負担や影響」をもたらす「教育実習公害」ともなりかねない、と述べている。「教育実習の質に関する保証をするためにも、学生の教育実習に対する意識を把握した上で、実習への意欲を十分なレベルにまで上げられるような教育援助や働きかけが望まれる」のである。

教育実習は、それまでの教職学習の応用と新たな課題への気づきの機会として、教師職を志望する学生にとって貴重な現場体験である。工学部の学生の場合、多くは実習時期が就職活動の時期と重なっており、教育実習のために就職活動を一時中断せざる得ない者もある一方、教育実習へ参加する学生にとって、企業への就職か教職に就くかに迷いながらも、教職への適性、志望を真剣に模索するよい機会になると考えられる。教育実習の中で、教職への志望を強化するケース、逆に教職への失望、不能感に見舞われるケース、そこまではなくとも冷静に進路を考え直すケースもあり、教育実習を経験することは、学生を大きく成長させることが期待される。本研究は、教育実習を経験することが、本工学部の学生の教師職志望にどのような変化をもたらしたかを確認するとともに、その変化がどのような理由によるものかを明らかにすることであった。

1.1 過去の研究

教育実習の経験が教師職志望を高める効果があることは、既に多くの研究で認められている(竹中, 1983; 今栄・清水, 1994; 池田, 1995; 阿形, 2005; 太田・岡崎, 2011; 秋光, 2011; 富田・吉村・山本・田中・川岡・原田・竹永・隅田, 2012; 磯崎・西谷, 2014; 有村, 2017)

竹中 (1983) は、教育実習履修者に対して教育実習前後にアンケートを行い、教職観や教職志望などの意識変化を調べた結果、教育実習を経験することは、学生の「学校や教師に対する否定的先入観」を変え、「学校や教師に対するよき理解者、協力者」に変えていくことが期待できると示唆した。教職課程履修者の中に、極めて強い教職志望の学生たちが多く含まれており、実習の後、実習生の半数は浪人覚悟で教職を志望し、40%近くは、小学校や他教科の免許のための通信教育受講を望んでおり、加えて、自由記述の回答には、実習前の訓練や教職課程教育の一層の強化・厳格化を求める声も多かったと述べている。

今栄・清水 (1994) は、教育実習が教員志望動機に影響する状況を明らかにすることを目的として、教育実習に参加する大学生を対象に、実習の前後2回、その時点の教員志望動機の強さ及び教職観等を評定させた。その結果、教育実習は教員志望動機を強め、実習前の志

望動機の強さ、教員生活に魅力を感じる程度、実習中の健康の3要因が、教員志望動機に影響を与えていた。また、実習後、教職観は肯定的になり、教員生活に魅力を感じる学生が増加した。加えて、実習前は実習生活に不安をもつ学生が多かったが、実習後は、実習生活が楽しく意欲的であったと回想する学生が多くなった。

阿形(2005)は、小学校教員養成課程および中学校教員養成課程の3年生を対象に、教育実習前後に行った調査結果について、教職観のうち、(1)教職志望、(2)教職適性(の自己評価)の2領域に焦点を当てて報告した。それによると、4割の学生が実習後に教職志望を強化し、男女別にみると、女子の方が実習後に志望を強化する者が多いことが示されている。教職適性の自己認知についても実習前後で変化し、4分の1の学生はもともと適性認知が高く、3分の1強が実習後に適性認知を高めていたが、後者と同じくらいの比率の者は、実習後、適性認知を低下させたか、低いまま変化をもたらさなかった。また、教育実習によって、教職志望を高める効果がある一方で、教職の困難さや大変さを実習で経験することによって、自己の教職適性に不安をもつ層も一定の割合であった。

太田・岡崎(2011)は、教職志望意識の低かった学生が教育実習という場を経験することで、しばしば教職志望意識を高めることに着目し、教育実習前の教職志望の高低で実習前から実習後への教職志望意識の変化を比較した。その結果、教職志望の低かった学生の中に、教育実習後、教職志望を大幅に高めた学生がいることが示された。

秋光(2011)は、教育実習が教師に必要な資質能力に関する自信や教師志望度に影響を与えることについて、教育実習経験を学習内容と人間関係から捉え、それらが教職への自信や教師志望度に与える影響について検討した。小学校での4週間の教育実習を履修した学部生と院生を対象に調査を行った結果、両者に対して、教育実習によって教職意欲が向上することは、対人関係能力の自信や教師志望度の高まりと正の相関があり、また学級経営力が向上することで、実践的指導力と自発的行動力の自信にもつながっていた。他方、指導技術を習得することは、学部生では実践的指導力の自信につながっていたが、院生では自発的行動力の自信を損なうという影響を与えていた。また、学部生に対して、実習生同士や児童との関係が教師としての自信を高めており、院生に対しては、指導教員との良好な関係が教師志望度を高める効果があった。

富田・吉村・山本・田中・川岡・原田・竹永・隅田(2012)は、教育実習に参加する学生へのアンケートにより、教育実習前後において、実習に関する認識、子供観、学習観、教師活動観、職業意志決定について、認識がどのように変化するか調べた。アンケートの回答を用いて、教育実習後の教職動機づけの高さを目的変数として、教育実習前後の他の変数を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、実習前の「教職動機づけ」、実習後の「資質・能力への自信」、実習前の「体力や精神力の不安」、実習前の「他の実習生との協力への期待」のみが有意な説明変数であった。このことから、「他の実習生との協力を期待し、実際に実習に参加してみると自らの資質や能力に自信を持った学生は、実習を通して教職動機づけを高めるという構図が浮かび上がってくる」とまとめている。

磯崎・西谷（2014）も、教育実習における教育実習生の成長について明らかにすることを目的として、教育実習校における教育実習前後における意識の変容を調査し、検討した結果、教育実習生は、3週間の初めての教育実習を通して、自己の心配から子どもへの影響に関する心配へと意識が変容しており、教えることから学ぶことへの成長の段階にあることが明らかになったと述べている。

有村（2017）は、教育実習を経験した学生を対象に、実習経験や認識変化に関するインタビュー調査を行い、(1) 学生の教育実習経験と認識変化の全体的構成と多様性、(2) 指導技術の習得プロセスの2点についての示唆を得た。その中で、学生の教育実習経験と認識変化の全体的構成と多様性に関しては、「実習以前から教師志望」と「実習以前から非教師志望」の学生があり、教育実習経験によって学生は自信や教師志望度、及び教職に関する認識を変化させること、それらの変化と教育実習を経ての実習への振り返りが実習後の展望に影響を与えることが示唆されている。

1.2 目的

前項で見たように過去の研究は、教育実習を経験することにより、教員生活により魅力を感じるようになったり教師職を肯定的にとらえるようになったりすること、またもともとあった教師職志望を強めるだけでなく、非志望から志望へと変化させることもあることなど、概ね教育実習が教師職志望に肯定的に作用していることを示している。他方、教育実習の中で教職の難しさや大変さを体験し、自らの教職適性に不安を抱くようになる者もいることが示された。

本研究も、教師職志望に及ぼす教育実習の効果について、実習前後の教師職志望の変化と、その際の自由記述の内容を分析することで検討した。特に、実習前後での記述内容の変化に関心があった。実習前後で、教師職志望（非志望）を変えた学生にとって、教育実習体験はどのような影響を与えたのか、またそこに介在する要因はなんであったのか、などを明らかにすることを目的とした。これらの知見を通して、教職課程における指導のあり方への示唆が得られるものと考えた。

2. 方法

工学部では、教育実習参加学生を対象として、平成2（1990）年度から平成11（1999）年度入学生には事前・事後指導科目として4年生前期必修科目「教育実践特講」を、平成12（2000）年度以降の入学生には事前指導科目として3年生後期必修科目「教育実習特講」を開講しており、平成23（2011）年度以降の入学生に対して開講された4年生後期必修科目「教職実践演習」において教育実習の事後指導も行ってきた。ただし、平成14（2002）年度から平成17（2005）年度は、中学校での「教育実習」を3年生2週間と4年生2週間の2回に分けて受け入れるところもあったため、「教育実習特講」を当該年度前期に3・4年生を対象として、ほとんどの学生の教育実習開始前と終了後に実施している。

これらの科目あるいは科目をまたいで、著者の担当分の授業の一環として、教育実習前後

で教師になりたいか否かと、その理由などを問う自由記述のアンケート調査を行った。

2.1 調査事項

教師になりたいか否かと、その理由等を問うた。下記のとおり、平成 12 (1999) 年度～平成 16 (2004) 年度と平成 17 (2005) 年度～平成 25 (2013) 年度で、一部質問内容を変えた。

1) 平成 12 (2000) 年度～平成 16 (2004) 年度

あなたは教師になりたいですか？

もしなりたいたいのであれば、教師という職業のどこに魅力を感じるのかを考えてみましょう。なりたくないのであれば、教師という職業のどのようなところが問題なのか考えてみましょう。

2) 平成 17 (2005) 年度～平成 25 (2013) 年度

あなたは教師になりたいですか？ A～Cのいずれかに○印をつけ、その2つの問(①と②)に答えてください。

A. 「教師になりたい」人は、①何故教師になりたいのですか？ ②あなたが良い教師になるためには何が必要だと思いますか？

B. 「どちらともいえない」人は、①何故教育実習へ行こうとしているのですか？ ②どのような条件を整えば「教師になりたい」と思いますか？ 逆に、どのような条件であれば「教師になりたくない」ですか？

C. 「教師になりたくない」人は、①何故教育実習へ行こうとしているのですか？ ②あなたにとって教員免許をとることにどのような意義や意味がありますか？

2.2 手続き

2000 年度から 2003 年度「教育実践特講」、2002 年度から 2012 年度「教育実習特講」、2013 年度～2018 年度「教職実践演習」の授業において、著者担当分の授業の一環として、前記のような形式の自由記述のアンケート調査を行った。

2.3 調査対象

教育実習を終えた上記の受講生のうち、前期アンケートへの回答が実習前後で確認できる 287 名 (男子学生 237 名, 女子学生 50 名) を対象とした。

3. 結果

3.1 教育実習前後での教師職志望の変化

教育実習を終えた学生の教師職志望・未定・非志望の内訳を、表 2 に入学年度に分けて示す。2002 年入学者、2004～2008 年入学者の数値が抜けているのは、それらの年度で著者が事後指導する機会がなくアンケートを実施できなかったためである。また、その他の年度でも、アンケートの回答を回収できなかった場合もある。

高山 (2014) が述べているように、平成 14 (2002) 年度入学者からは、教育職員免許法及び施行規則の改正により、教員免許取得へのハードルが高くなったこともあって、教職課程

表2 教育実習を終えた学生の教師職志望・未定・非志望の内訳

入学年度	教師職志望			未定			教師職非志望			男子	女子	計
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計			
	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)
1997	17	6	23	5	1	6	7	4	11	29	11	40
1998	19	6	25	3	0	3	2	0	2	24	6	30
1999	13	4	17	8	0	8	9	1	10	30	5	35
2000	20	1	21	0	0	0	2	3	5	22	4	26
2001	14	2	16	5	0	5	12	3	15	31	5	36
2003	2	0	2	1	0	1	0	0	0	3	0	3
2009	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
2010	10	0	10	5	1	6	0	0	0	15	1	16
2011	8	0	8	6	3	9	2	0	2	16	3	19
2012	11	0	11	7	2	9	3	0	3	21	2	23
2013	3	1	4	7	3	10	3	0	3	13	4	17
2014	9	3	12	9	1	10	1	1	2	19	5	24
2015	5	0	5	5	3	8	3	1	4	13	4	17
総計	132	23	155	61	14	75	44	13	57	237	50	287

受講者が大きく減少し、教師職志望者も減少している。2013年度入学生と2015年度入学生では教師職志望者が大きく減少しているものの、それ以外の入学年度生で、依然半数近くの学生が教師職を志望している。

教育実習を経験した学生のうち、実習前に同様のアンケートに回答した学生は259名であった。これら学生の、教育実習前後における教師職志望の変化を表3と図1に示す。

表3から、教育実習前後で教職志望・非志望の数はほとんど変化していないことがわかる。むしろ、教師職非志望の数が、教育実習前(46名)より教育実習後(49名)わずかに増加している。学生の多くは教育実習後も、教育実習前の教師職志望・非志望を維持していたが、志望・非志望を変化させた割合は、教師職志望者24%(33名)、志望未定者45%(33名)、教師職非志望者46%(21名)で、志望未定者と教師職非志望者は、教師職志望者に比較して、志望・非志望を変化させた割合が大きかった($\chi^2=13.71, df=2, p<.01$)。加えて、志

表3 教育実習前後における教師職志望の変化

		実習後			計
		教師職志望	未定	教師職非志望	
実習前	教師職志望	107	22	11	140
	未定	20	40	13	73
	教師職非志望	13	8	25	46
計		140	70	49	259

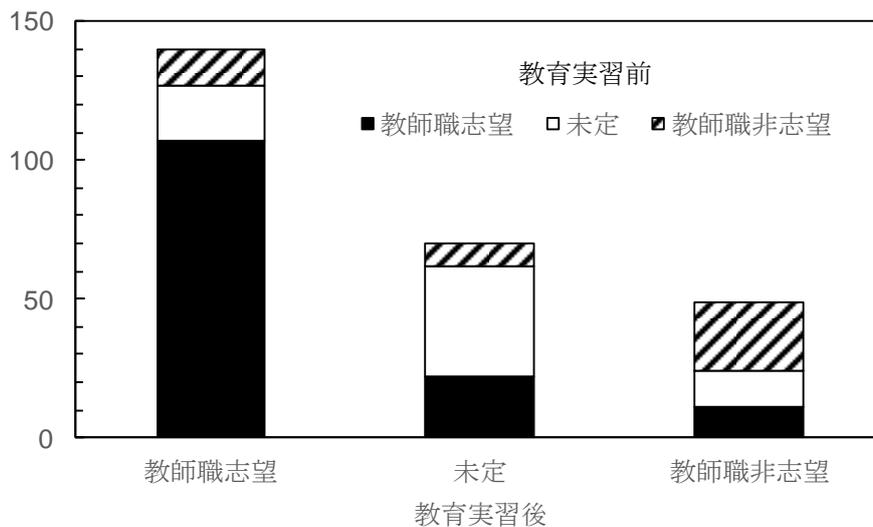


図1 教育実習前後での教師職志望の変化

望の変化の方向も、教師職志望者では非志望への変化よりも未定への変化の割合が多いが、志望未定者では教師職志望への変化が非志望への変化よりも多く、非志望者でも志望への変化が未定への変化よりも多くなっていた。

3.2 教育実習前後での自由記述の変化

実習前から教師職を志望している学生と比較して、志望しない学生や未定の学生は、教育実習を経験して、比較的高い割合で当初の教師職志望・非志望を変化させていた。志望を変化させた学生のアンケートへの自由記述から、その原因を探った。

(1) 教育実習後に教師職を志望するようになった学生の記述

教育実習前には志望未定（20名）か非志望（13名）であったが、教育実習後に教師職志望に変化した学生の、自由記述への回答を分析した。33名の自由記述について、記述内容を、複数の内容がある場合はそれぞれを、表4のようにカテゴリー化し、その出現頻度を求

表4 教育実習後教師職を志望するようになった学生の記述内容

カテゴリー	計
教師職への魅力	43
教師職モデルへの憧れ	5
教師職の責任の認識	7
仕事の負担	2
教師職に就く難しさ	1
進路への迷い	5

めた。

最も多かったものは、「教師職のやりがい」、「生徒との触れ合いの楽しさ」、「教えることによる自己の成長への期待」、「職の安定性」などを含む「教師職への魅力」で 43 件あり、自由記述の 68%を占めていた。また、数は少ないが、教育実習現場や過去の学校生活での恩師の活動や、親族の教職活動の再認識といった「教師職モデルへの憧れ」(8%)、「教えることの難しさ」や「生徒への影響」など教師職に就くことへの覚悟をあげている「教師職の責任の認識」(11%)、直近の進路について企業への就職を選択し将来教師職へ就くことを希望するものや、教師職への適性についての不安などを含む「進路への迷い」(8%)もあった。加えて、教師職を希望するものの、教員採用試験のハードルや教育現場でのハードワークに不安を抱く記述もあった。

これらの結果は、教育実習を体験することにより、教師職への現実的な理解が進み、その楽しさや厳しさを具体的なレベルで認識できるようになったことを反映するものといえる。

(2) 教育実習後教師職を志望しなくなった学生の記述

教育実習前には志望未定(13名)か志望(11名)であったが、教育実習後に教師職非志望に変化した学生の、自由記述への回答を分析した。24名の自由記述について、記述内容を、複数のある場合はそれぞれを、表5のようにカテゴリー化し、その出現頻度を求めた。

「教師職への魅力」(18%)や「教師職モデルへのあこがれ」(2%)に関する記述もあるが、多くは教師職に就くことへの懸念や不安に関する記述であった。その中でも最も多かったのは「教えることの難しさ」や「生徒への影響」など教師職の責任の重さと、「生徒との接し方の不安」や「教えることへの自信なさ」など教師職に就くことへの不安をあげた「教師職への不安」で21件あり、自由記述の43%であった。また、「保護者への対応」を含む「授業以外の仕事」、「長時間労働」、「職場の人間関係」など「仕事の負担」を述べたものも8件(16%)あり、採用試験の難しさなど「教師職に就く難しさ」(6%)、「教師職・教育環境へ

表5 教育実習後教師職を志望しなくなった学生の記述内容

カテゴリー	計
教師職への魅力	9
教師職モデルへの憧れ	1
教師職への不安	21
仕事の負担	8
教師職に就く難しさ	3
教師職・教育環境への不満・失望	2
進路への迷い	5
	49

の不満・失望」(4%)もあった。教師職志望へ変化した学生にもあった「進路への迷い」も5件(10%)あったが、職の選択に関する記述では教師職よりも就職を選択するというものであった。

これらの結果は、教育実習を通して学校現場を直接体験することにより、生徒指導、事務処理、外部者との対応など、現場で直面する、教科指導以外の活動の多さに圧倒され、教師職への志望を少なからず減退させる学生もいることを示している。

4. 考察

2000年度から2018年度に教育実習に参加した教職課程受講者に、教育実習前後で教職志望について自由記述で回答を求め、両方に回答した259名の記述内容を分析した。その結果、入学年度によって教職課程を受講する学生数はさまざまであるが、教育実習後は総じて半数近くの学生が教師職を志望しており、特に、もともと教師職を志望する学生が、教育実習後もその志望を維持する割合は76%と、非志望や未定を維持する割合よりも高いことが明らかになった。教育実習は、それまでの教職学習の応用と新たな課題への気づきの機会として、教師職を志望する学生にとって貴重な現場体験である。教育実習の体験は、教職受講学生の教師職志望を比較的高い割合で維持する働きがあるといえる。

教育実習後、教師職非志望あるいは志望未定から教師職志望に変えた学生は28%(33名)あり、その自由記述の約3/4は「生徒との触れ合い」や「教師職のやりがい」など「教師職への魅力」をあげていた。また、教育実習校の指導教員へのあこがれをあげた学生もあった。今栄・清水(1994)も教育実習が教員志望動機を強めるとし、教員志望動機に影響を与えている要因の一つとして「教員生活に魅力を感じる程度」をあげている。良い教育実習の経験は、教師職への迷いや否定を肯定に変えるものといえる。

他方、教師職志望あるいは志望未定から教師職非志望に変えた学生も11%(24名)あった。阿形(2005)の調査結果では、教育実習後、自らの教職適性を低下させるか低いままの学生が実習生の1/3強あり、その数よりは少ない。自由記述の内容からは、「教師職への魅力」や「教師職モデルへのあこがれ」も20%程度あるものの、教師職の責任の重さ、生徒との接し方の不安、教えることへの自信のなさなど「教師職に就くことへの不安」をあげたものが半数近く(43%)あり、自らの教職適性に自信が持てなかったことがうかがえる。また、保護者への対応を含む「授業以外の仕事」や「長時間労働」など教師職の「仕事の負担」(16%)、「教師職に就く難しさ」(6%)、「教師職・教育環境への不満・失望」(4%)など教師職を否定的にとらえる記述内容が1/4程度あった。教育実習での経験で適性に自信が持てなかったり、教師職を肯定的にとらえられる経験ができなかったりして、教師職志望に結びつかなかったのであろう。

教職課程を受講する学生は、入学当初から教員を目指して受講している者だけでなく、工学部で取得可能な資格の一つと考え受講している者、保護者が勧めるので受講している者、知人が受講しているので何となく一緒に受講している者など様々である。学年進行とともに

に徐々に受講者の数は減少し、教育実習まで到達する学生は初年次に登録した学生の 2～3割程度となる。最終学年まで残り、教育実習に参加する学生は、ごく一部を除いて、教師職を進路の選択肢の一つと考えていると言ってよいであろう。志望・非志望を変えた学生の記述は、教育実習が、教育現場での仕事の厳しさや大変さ、責任の重大さについての認識を深め、単なる資格取得の手段としてではなく、改めて自らの教職への適性や志望を真剣に考える重要な機会となったことを裏付けている。

しかし、そもそも教師職を志望していない学生が、実習の意義を十分理解せずに教育実習に参加する事例もないわけではない。これについては、有馬（2017）が述べるように、「学生の教育実習に対する意識を把握した上で、実習への意欲を十分なレベルにまで上げられるような教育援助や働きかけが望まれる」。そのような取り組みを通して、教師職を志望していなかった学生が、教育実習を経験することで「教師職への魅力」を感じ、教師職を志望するようになることは、教育実習事前指導の一つの成果と言えるであろう。

われわれ教職課程担当者は、教師職に意欲や適性のある、志望者や未決定者、あるいは非志望者であっても、教職課程を含むこれまでの学びを活かし良い実習経験を積むことで、教師職が進路選択の有力な候補となることを期待している。多くの学生が教育実習への参加目的を教師職への適性を見極めるためと回答しているので、適性を冷静に判断した上での志望の変更であれば、自ら掲げた教育実習に参加する目的に沿った意思決定と言えるであろう。他方、限られた期間の中での教師職や教育現場に対する否定的な印象から、意欲を失うことはいかにも残念である。教育実習への事前指導において、教師職の意義・役割とともに現実の教育現場についての適正な理解を促すこと、また事後指導において、実習経験を冷静に評価させることは、教職課程の取り組みとして必要なことと考える。

注) 本稿は、第一著者である高山の指導で、共著者の小西和哉がまとめた平成 31 年度情報学科卒業研究「教師職志望に及ぼす教育実習の効果」をもとに、一部データの訂正、ならびに文章の加筆修正を行ったものである。データの収集・分析ならびに論考についての責任はすべて高山に帰する。

引用文献

- 阿形健司（2005）．学生の教職観に与える教育実習の効果——パネル調査の結果から——
愛知教育大学研究報告，54（教育科学編），87-90.
- 秋光恵子（2011）．教育実習経験が教師に必要な資質能力に関する自信と教師志望度に及ぼす影響—実地教育Ⅲを履修した学部学生と大学院生の比較— 学校教育学研究，23，43-52.
- 有馬比呂志（2017）．開放制教職課程における教育実践学修の課題 近畿大学工学部教職課程年報，4，2-11.
- 有村勇紀（2017）．教育実習における学生の経験と進路認識変化—志望度・自信の変化に着

- 目した質的研究— 教育デザイン研究, 8, 42-51.
- 中央教育審議会 (2006). 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申) (平成 18 年 7 月 11 日) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm (参照 2020-05-07)
- 中央教育審議会 (2015). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ~学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて~ (答申) (平成 27 年 12 月 21 日) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf
- 中央教育審議会 (2019). 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会 (第 103 回) 資料 1-2 (平成 31 年 1 月 25 日) https://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/01/__icsFiles/afieldfile/2019/01/24/siryoyou1-2.pdf (参照 2020-05-07)
- 池田静治 (1995). 教育実習の効果に関する研究—教職志望の強化要因について— 國學院短期大学紀要, 13, A147-A159.
- 今栄国晴・清水秀美 (1994). 教育実習が教員志望動機に及ぼす影響—事前・事後測定法による分析— 日本教育工学雑誌, 17 (4), 185-195.
- 磯崎尚子・西谷真美 (2014). 教育実習における教育実習生の意識変容と成長に関する研究 人間発達科学部紀要, 9(1), 51-59.
- 近畿大学工学部 教職課程履修要項 平成 31 年度 (2019)
- 文部科学省 (2018). 教育職員免許法等の改正と新しい教職課程への期待 平成 30 年度教職課程認定申請に関する事務担当者説明会 (平成 30 年 12 月 20 日) https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/12/21/1411908_02.pdf (参照 2020-05-07)
- 太田 正清・岡崎 明宏 (2011). 教育実習生の実習前から実習後への教職志望意識の変化に関する調査 (1) — 教職志望高グループと低グループとの比較 — 中国学園紀要, 10, 129-137.
- 高山智行 (2014). 教師職志望の動向～「教育実習特講」受講者へのアンケートから～ 近畿大学工学部教職課程年報, 1, 1-10.
- 竹中暉雄 (1983). 教育実習による教職課程履修学生の意識変化 総合研究所報 9(1), 21-44.
- 富田英司・吉村直道・山本久雄・田中雅人・川岡勉・原田義明・竹永雄二・隅田学 (2012). 教職への動機づけを規定する要因の探索 大学教育実践ジャーナル, 10, 23-31.

体 験 記

合格体験記

工学部 化学生命工学科
氏名 大木 雪

【合格した自治体（校種・教科）】

広島県（中学校・理科）

① いつから勉強した？また、どんな勉強から始めた？

私が本格的に勉強を始めたのは3回生の冬からです。

過去問を一通り解き、中学理科の総復習から始めました。

② あなたのオススメの教材は？

【理科】

パーフェクトコース（学研）

ハイクラス徹底問題集（文理）

セミナー化学・物理（第一学習社）

東京アカデミー教員採用試験対策 専門教養 中学校 理科

過去問

【教職教養】

過去問

③ とっておきの勉強法は？また、1日に何時間勉強していた？

同じ場所で勉強をやり続けると飽きる性格なので、場所を変えながら勉強をしていました。研究室、図書館、電車通学であったため電車の中（往復3時間）、家のリビング等。

1日の勉強時間はバラバラでしたが、平均すると約5時間です。

④ 息抜きの方法は？くじけそうになったときは？

どうしても気分が乗らないときは勉強を全くせずに遊びに行っていました。

メリハリが大切だと思います。

⑤ どの自治体を受験した？

広島県のみ

⑥ ⑤を踏まえて、それぞれの自治体の面接や筆記(専門含む)をどのように対策していた？

広島県の教職教養は暗記をしていないとできないのでひたすら覚えました。

⑦ 授業(ゼミも含む)や就活、教員採用試験の兼ね合いは？

ゼミの先生が教職に理解のある先生だったので負担にはなりませんでした。

就活は一切していません。

⑧ アルバイトやボランティアはどうしていた？

塾講師のアルバイトは4回生の5月から週1回に減らしました。

ボランティアは3回生まで行っていました。

⑨ 大学生活の中でやっておいた方がいいことは？

色々なことに挑戦することです。旅行やアルバイト、サークルなど何でもいいと思います。

私はそうした経験を面接でたくさん話すことができました。また、教師になったときに生徒に伝えられることも多くなると思います。

⑩ 教職ラボの活用法は？

模擬授業や面接練習をたくさんすることです。

⑪ 夢に突き進んでいく後輩たちへメッセージ！！

悩むことは多いと思いますが一人で考え込まずに周りの人に相談してください。試験で

は何が起こるか分かりません。最後の最後まで頑張ってください。

介護等体験報告書

大西 翔

(機械工学科 3 学年)

私は、今回の介護等体験で介護老人保健施設と特別支援学校で様々な経験をしました。それぞれの施設で全く違うところもあれば、共通しているところもありました。その中で特に印象深かったことを三つ述べたいと思います。

まず一つ目に、入居者さんそれぞれにあった対応をしているところです。これは、介護老人保健施設で印象深いことです。例えば、食事の配膳です。食事も入居者さんそれぞれに消化の良いものであったり、ご飯の量であったりととても配慮された食事が用意されていました。また、他の方の食事を食べてしまう方から配膳するなど、私が体験した1週間では知りえないことまで職員さんは常に気にしながら仕事をされていました。それは、教員にも言えることだと思います。生徒と長い間過ごす中で、それぞれの生徒の個性を知り、一人一人にあった対応をしなければならぬと感じました。

次に二つ目は、生徒への指示の仕方です。これは、特別支援学校で印象深いと感じたことです。口頭での説明が中心的な大学とは違って板書を行っていました。それも文章で続けて書くのではなく、大事な点をしっかり押さえて端的に伝えていました。これは、わかりやすいだけでなく、生徒がやり方や手順を忘れてしまったときに黒板を見て、考える時間が作れると感じました。また、このような活動は、学年・年齢・障害は関係なく行ったほうが良い活動だと感じました。

そして三つ目に、コミュニケーションの取り方です。これは、介護老人保健施設と特別支援学校どちらも言えることでした。中には、上手く話のキャッチボールが出来ない方もいました。そのとき、職員さんや教員の方は手に触れる、目を合わすなどによってコミュニケーションを取られていました。話ができないから諦めるのではなく、挑戦してみると、手を引っ張って、施設の花が見える場所へ連れて行ってってくれるなど、直接話したわけではないけど伝えたいことが分かったが気がします。

最後に、上記にあるようなことはもちろん、それ以外にも学ぶことはたくさんありました。この介護等体験は、私が今まで大学では学ぶことのできないことを学びました。この経験を生かして教員に向けて、勉強していきたいと改めて思いました。

介護等体験から学んだこと

下森 萌

(電子情報工学科3年)

私は介護等体験でたくさんのことを学ぶことができ、とても貴重な体験となりました。

まずは、5日間行った社会福祉施設での体験についてです。施設内は特別養護とデイサービスに分かれていました。特別養護は自分1人で生活するには難しい、要介護3以上の方々が入居されており、私たちが想像するコミュニケーションが上手く取れない方も多くいらっしゃいました。特に初めは、入居者さん達にとっても警戒されて上手く関わることができませんでした。それでも、積極的に笑いかけたり、車椅子を押す等のサポートをしたりすると、笑い返してくれるときや感謝の言葉を精一杯伝えてくださるときがあり、とても嬉しかったです。対して、デイサービスは1人で活動できる方が多くいらっしゃったので、一緒にゲームをしたりお話をしたりしてコミュニケーションをとることができました。しかし、補助は決して行わないよう施設の方に注意を受けました。基本は自宅で生活している方々なので、特別に必要なときのみ施設の方が介入し、できるだけ1人で活動ができるようなサポートをなさっていることを知りました。私は、この5日間で大変なこともありましたが、最終日には初日に比べて壁が無くなり、関わってくださる方々も増えたので体験を終えることが少し寂しく、自分自身の何かが変わったように感じました。

続いて、2日間行った特別支援学校での体験についてです。1日目は作業学習という授業に参加させていただきました。作業学習とは、就職をしたときを想定し、直接仕事につながるような活動を行うものでした。先生は、初めに作業内容を伝えた後、役割分担から活動の計画、指示だしに至るまでをすべて生徒に行わせていました。生徒たちは細部まで気を使いながら行っており、本当の仕事かのように、責任を持って取り組んでいるように見えました。先生が行うのは、作業後により良い方法や改善点について反省させたり、指摘したりすることでした。先生の行き届いた視点と生徒の行動力に驚かされ、とても勉強になりました。2日目は、通常授業を見学させていただきました。1日目に比べて生徒とコミュニケーションが取れる機会が多く、それぞれの個性を見ることができました。すべての活動が皆同じようにできるわけではありませんが、それを互いに協力することで補っている場面が何度もありました。先生が、配慮はしていても過度な支援はしておらず、“自立”を意識しているのが伝わってきました。

私はこれらの体験から、本当の意味で相手のことを考え、接しているところを見ることができました。その人には何が必要なのか、どこまで手伝うべきなのか、その判断は教師という立場では常に必要になると思います。何が正解なのかを見つけることは難しいですが、体験したこと、感じたこと、見たことを、これからの自分に少しでも生かしていけるよう努めていきたいと思います。

介護等体験から

清藤 亮太

(ロボティクス学科3年)

介護等体験では、社会福祉施設に5日間、特別支援学校に2日間お世話になり、いろいろなことを学び、考えさせられた。

社会福祉施設では、当初自分は、教育と何の関係があるのか疑問に思っていた。しかし、体験を行う間でそのような疑問は消え、どのようにして利用者様とコミュニケーションをとるのかということを考えることに夢中になっていた。社会福祉施設の方の助言より、言語による伝達が難しい方には、手を繋いでみることを、アイコンタクトを行うことを毎日、繰り返し行った。すると、最終日には、今まで見ることでできなかった反応があり、驚いた。また、利用者様からは、「あなたの顔は何回も見ましたから、覚えました。」と言われ、一度で伝えることが難しいことでも、何度も何日も行うことで伝えられることがあることを知った。体験を終え、もう一度疑問について考えた。その結果、社会福祉施設での体験の意義は、「様々な生徒の個性を見抜き、その個性にあったコミュニケーションを行うためのスキルを磨き、生徒理解に役立てるため。」なのではないかと考えた。

次に、特別支援学校では、1. 先生方の対応をよく観察し、どのように個別の対応を行っているのか学ぶこと。2. 生徒との距離をうまく保つ。という2点を目標に体験を行った。私は、中等部を担当した。特別支援学校には、テキストというものがなく、学習を行うためのテキストは先生方が個別に作成しているということを知った。そのテキストは、先生による手書きで作成されており、先生の愛情が込められているなど感じた。また、生徒の「やりたい」という意思を尊重していた。しかし、その中でダメなことは、「ダメです。」と指摘せず、「どう思いますか?」、「いいんですか?」と注意し、生徒にダメなことを考えさせていた。かまって欲しいために、ちょっかいをかけてくる生徒には、見守ること、そのちょっかいにすべて対応しないと行ったことを行い、生徒との距離を一定に保つことを学んだ。それらに注意しうまく距離を保てたと考える。また、「できることは生徒に行わせてください。」と助言を頂き、生徒を支援することと、しないことの線引きが難しいなと感じた。さらに、教員を目指すことを悩んでいたが、児童、生徒と一緒に活動する中で、もっと児童、生徒に寄り添いたいという気持ちが芽生え、教員を目指すという意思を固めた。

以上の経験は、今後の社会生活において役に立つことである。この経験より、介護が必要な方は、邪魔な存在ではないこと。不幸でないこと。考えているよりもできることはたくさんあること。健常者の私に勝ることがあること。同じ人であることに気づいた。いろいろな人がいて、初めて人間と言えるような気がした。教員になったときには、道徳教育で私の経験を生徒に伝え、刺激を与えることができればよいと考えるようになった。

教育実習を振り返って

狭間 美沙

(化学生命工学科 4年)

3週間の教育実習が終わり思うことは、「人生で一番短い3週間」でした。最初は、3週間という長いと思っていましたが教材研究、指導案の作成に追われてあっという間に1日が終わり、そして3週間が過ぎたという印象でした。反省や後悔はたくさんありますが、教育実習ではたくさん学ぶことができました。

授業実習で指導・助言された中で印象に残っている言葉が「今日は何を教えたいのか、何がポイントかを意識しながら授業を行う」ということでした。授業が思ったように進まずあまい授業になってしまった時に、指導教諭から「主眼がボヤけると全てがボヤけてしまう。変に取り繕うと、ますます不自然な流れになってしまう。」との言葉をいただきました。私は本時の目標を考え授業を行っていましたが、目標の設定・考え方が不十分であると感じました。それだけでなく、この授業で生徒に何を覚えてほしいのか、何が重要であるかをはっきり意識せず授業を行っていたと反省しました。

教育実習を通して新たに得たものは、生徒の観察・理解度の定着を見る難しさです。自分が想定したよりも生徒が知識を持っていなかったり、生徒が授業についてこられていなかったりと授業が思うように進まないこともありました。生徒の理解が不十分であると感じたときはもう1回説明を繰り返したり補足説明を加えたりするなどクラスや生徒に合わせた臨機応変な対応が必要であると感じ実行しました。指導案通りに進めるのも大事ですが、それ以上に生徒が今日の授業で学んでほしいことを達成するために生徒に今何が足りないのかを授業をしながら探していく過程も授業中に必要なことであり、そのために生徒の観察や生徒への質問の投げかけ・コミュニケーションが非常に重要であると感じました。

教師は、「白いキャンバスに油絵の具で絵を描くような仕事」と指導教諭の先生に伺ったように自分がその教科の楽しさを教え、その教えたことをもとに学んでいくと思うとやりがいのある仕事であると同時に、学びの入り口になる存在になるかと思うと大変責任のある仕事であると改めて感じました。それだけでなく、生徒指導・学級経営など様々な業務をこなし広く生徒を気にかけて、生徒が安心・安全に過ごせるよう様々な面に気を使いながら行動していると感じました。生徒が主体となるよう、どのように振る舞えばよいかを常に考え行動されていると感じました。

今後、生徒との交流・コミュニケーションの仕方について努力すべきだと感じました。明るく大きな声で挨拶、自分から積極的に話しかけ会話をするなど人との関係を築くために何が必要かを考え自分から早く実行できるようにならなければと思いました。また、自分が理想とする教師像・授業像に近づくためこの教育実習で学んだことをもとに努力し続けていきたいと思います。

教育実習を終えて

大村 興平

(機械工学科 4 年)

私は、母校の担当教諭の方が入院されたので、大学の附属高校で3週間の実習をさせていただきました。実習校は私の通っている大学の近くにあり、名前も場所も知っていましたが、中へ入るのは初めてでした。

事前に行われた教育実習説明会の際に校長先生や教頭先生からの説明を受けた時は逃げ出したい気持ちになりました。その日から実習前日まで、50分間授業できるのか、生徒と上手くやっっていけるか、先生方にご迷惑をかけないかなど、不安と緊張は深まる一方でした。しかし、実習期間に入り生徒と接してみると、個性豊かで、授業にも積極的に参加しており、彼らのためにも授業を精一杯頑張ろうという気持ちになり、3週間の実習もあっという間に感じられました。さらに先生方も親切な方ばかりで、私のために授業前後にわざわざ時間を作ってくださり、熱心な指導をいただきました。

私は1~3年生の技術を担当しました。授業を行う際は、「大きな声ではっきりと話す」と「メリハリをつけ、生徒に興味を持ってもらえるような授業をすること」を目標にしました。どんなに分かりやすい授業でも、声が小さく生徒に聞こえなければ意味がないと考えたので、第一の目標として大きな声ではっきりと話すことを心がけました。しかし授業はホームルーム教室だけでなく、技術教室や情報教室などを使って行うこともありました。教室が違うだけで生徒の授業態度も違い、教室の雰囲気づくりにばかり気を取られてしまい、思い通りに授業を行うことができなかつたこともありました。授業を終えた後は生徒に申し訳ない気持ちでいっぱい、残りの授業を無事に終えることができるだろうかという不安になることもありました。しかし、私を指導してくださった先生や授業参観させていただいた先生方からの様々なアドバイスを参考に、自分なりに工夫をして授業を繰り返していくうちに、自分の構想通りの授業を行えるようになったとともに、授業をする楽しさを感じられるようになりました。先生方のアドバイスの中で特に印象に残っているのは、「教師になった今でも、授業を時間通りに終えることは難しいし、クラスによって多少の差はある」という言葉です。それぞれのクラスに特色があり、同じように進むことができないが、それを難しいことと考えず、それぞれのクラスの個性を大切にしながら授業を進めることが重要だと学びました。また、中間テストや期末テストは全クラス同じように行うので、最終的に全クラス進度が合うように時間配分をされていて、教師という職業は臨機応変に対応しなければならないのだと強く感じました。また、私は生徒との距離を縮めるために、休み時間は授業の準備がない限り生徒とコミュニケーションをとったり、技術の授業がない火曜日と金曜日は他教科の授業参観に行ったりし、他学年他クラスの生徒と一緒に過ごす時間を可能な限り増やし、生徒とのコミュニケーションをとることに努めました。そうしていくうちに、生徒から私に声を掛けてくれる機会も増え、授業中にも授業を盛り上げようとしてくれるなど、生徒にはたく

さん助けられました。彼らがいたからこそ、私は、この3週間を充実した楽しい期間だったと感ずることができました。私がこの実習で学んだ事は、「授業は1人でつくるものではない」ということです。もちろん、他の人に頼ってばかりではいけないのですが、自分の授業が他人から見たらどのように見えるのか、感ずるのかを考えながら授業を構想し、さまざまな工夫を加えていかなければ、自分が何を伝えたいのかが理解されないのではないかと感ずりました。そのためにも、他の先生方の意見や授業を受けている生徒の感想到に耳を傾けることを忘れてはいけないと感ずりました。また、「教える」という気持ちも大切ではありますが、私自身も生徒から「学ぶ」という意識をもつことでよりよい授業作りができるのではないかと思いました。

この3週間の実習から、生徒のことはもちろんですが、教師という仕事についても勉強になりました。生徒の動きや発言は、予測できず、何か突然起こることもあります。そんな生徒に付き添う先生方は本当に素晴らしいと思いました。先生方は、教えることはもちろんですが、授業の準備やその他の雑務にも追われており、ずっと学校に残って仕事をしている方もたくさんいました。自分が生徒の時にはわからなかった教師の大変さを実感しました。講義では学ぶことができないようなことをたくさん学び、経験することができました。忙しい時期に急遽実習を受け入れてくれた実習校や先生方にはとても感謝しております。実習前の自分より成長することができたと思っています。しかし、人間としてまだまだ未熟な部分は多いです。生徒の模範となれるような人間になれるように日々精進していきたいと思います。

最後になりましたが、担当ホームルームの3年3組の生徒たちには感謝しています。中学生生活最後の文化祭2日間を一緒に過ごすことができました。文化祭準備後の教室に訪れた際、黒板にクラスメイト全員の名前、担任の先生の名前、そして私の名前が書いてありました。クラスの一員として認めてくれていることがとても嬉しかったです。合唱コンクールでは優秀賞とピアノ賞を獲得することができ、クラス全員で喜びを分かち合うことができました。また、最終日にはサプライズで寄せ書きやプレゼントもいただき、私にとって忘れられない宝物となりました。未熟者ではありましたが、熱心に指導してよかったと思えました。ありがとうございました。

教育実習を終えて

荻屋田 美穂

(電子情報工学科 4 年)

教育実習は本当に毎日が学ぶことだらけで、あっという間の充実した日々でした。指導教官や生徒達に恵まれており、その環境の中で学ばせて頂いたことに感謝するばかりです。なかでも、実習生の中で研究授業の代表に選ばれ、校長先生やほかの実習生、数学の先生方など大勢に見学されながらの魅せる授業が出来たことも成長に繋がりました。

今回の実習を通しての1番の発見は、導入の大切さです。導入でいかに生徒の心を掴めるのかを3週間を通して常に試行錯誤しました。興味を持って聞いてもらわないことには、どんなに素晴らしい授業をしても意味がありません。常に生徒に問いかけ、独りよがりな授業にならないように意識しました。生徒の興味が向いているのか否かを感じる事が出来ることも、現場だからこそ学べたことでした。自信を持って授業をすることで、生徒もついてきてくれたことが更に自信に繋がりました。また生徒の心を掴むために、日頃からの関わりも大切にしました。授業前は生徒と会話をし、放課後も生徒が最後の1人になるまで教室に残り続けて同じ時間を過ごしました。その成果もあったのか、生徒から昼ご飯に誘ってもらい、廊下で会った際も近寄って来てくれるような関係性を築くこともでき、より授業もやりやすくなっていきました。お別れの際に生徒主催で用意してくれていた沢山のプレゼントの全てが宝物です。何より生徒に惜しんでもらえるような存在になれたことが、喜びでした。

もちろん、興味を持ってもらうだけではいけません。授業の軸をしっかりと立てる重要性も教わりました。授業を通して学んだことが1つもなければ、その授業には意味がありません。何を学んで欲しいのか根底をしっかりとさせることで、授業にはまとまりができ、何を生徒に強調したいのかも明確になります。伝えたいことは何度も繰り返し言うことで、生徒にすり込んでいくのです。私が学生の頃も気づかないうちに、すり込まれていたと思うと、巧みな技術に驚かされるばかりです。教師側の視点で見ると、当時受けていた授業も違う角度から様々な発見がありました。人に教えることは難しいことですが、それだけに工夫する面白さやそれに見合ったやりがいがあります。

教壇に立って教える以上、責任ある言動が求められるため、嘘は許されません。言葉一つが生徒の今後の人生を左右する力を持っているのです。今後の課題として、生徒へ向ける言葉の一言一句にもっと配慮をしようと思いました。生徒たちと関わり、教えていく中で、人を育てることが教師の使命なのです。成績を上げるだけならば塾など学校でなくても学べます。教師としての満点はないけれど、正解がない中でより良いものを目指し続ける面白さがこの職業にはあります。今回出会った私の初めての生徒達を忘れず、今後も生徒と共に常に成長していけるような教師になれるよう努力していきたいです。

資料

令和元年度 教職課程行事報告

【学内説明会】

日時	時間	場所	対象	項目	内容
4月4日(木)	11:30～ 12:30	近畿大学工学部 多目的ホール	1年	教職課程説明会	教職課程について
4月10日(水)	18:10～ 19:10	近畿大学工学部 C215	介護等体験 希望3年	令和元年度介護等 体験説明会	介護等体験申込と体験の 日程調整
4月22日(月)	12:20～ 13:00	近畿大学工学部 C215	4年	令和元年度教育 実習事前説明会	教育実習における注意 事項
5月8日(水)	18:10～ 19:10	近畿大学工学部 C215	3年	令和2年度教育 実習説明会	教育実習実施までの手続 き、教育実習申込みと内諾 について
7月10日(水)	12:20～ 13:00	近畿大学工学部 C215	介護等体験 希望3年	令和元年度介護等 体験事前説明会	体験における注意事項
10月5日(土)	9:00～ 12:10	近畿大学工学部 H120	3・4年	教育実習報告会	令和元年度教育実習報告
10月7日(月)	10:40～ 11:40	近畿大学工学部 C206	4年	教育職員免許状 申請手続き説明会	免許状授与申請について
11月13日(水)	12:30～ 13:00	近畿大学工学部 C215	介護等体験 希望3年	令和元年度介護等 体験事前説明会	体験における注意事項
12月13日(金)	12:20～ 13:00	近畿大学工学部 C212	2年	令和2年度介護等 体験説明会	介護等体験の説明と申込 について

【学外での活動】

日時	場所	内容	
4月5日(金)	広島県社会福祉会館	介護等体験関係大学 連絡会議	令和元年度社会福祉施設に おける介護等体験の日程調整
4月27日(土)	広島工業大学	中国・四国地区私立大学 教職課程研究連絡協議会	定期総会・研究協議会
5月25日(土)～26日(日)	近畿大学	全国私立大学教職課程協会	定期総会・第39回研究大会
5月下旬～11月上旬		教育実習	教育実習現場指導(1校)
8月上旬～9月中旬	広島県内社会福祉施設 (2施設)	介護等体験(社会福祉施設)	
12月3日(火)～4日(水)	広島県内特別支援学校 (1校)	介護等体験(特別支援学校)	
12月21日(土)	広島工業大学	中国・四国地区私立大学 教職課程研究連絡協議会	運営委員会・研究協議会

【教職課程運営委員会】

日時	内容
7月1日(月)	年報・教職課程受講者・教育実習・介護等体験について
8月30日(金)	教職課程履修要項について
12月17日(火)	令和2年度教育実習参加者について 令和2年度年間スケジュールについて

令和元年度 教職課程受講者数

(単位：人)

学科	学年		1年生	2年生	3年生	4年生	計
化学生命工学科		実人数	16	12	7	6	41
	内訳	理科(中)	12	8	4	6	30
		理科(高)	16	12	6	6	40
		工業	0	0	1	0	1
機械工学科		実人数	2	3	3	3	11
	内訳	技術	2	1	2	2	7
		工業	2	2	3	3	10
情報学科		実人数	2	2	0	0	4
	内訳	技術	1	0	0	0	1
		情報	1	2	0	0	3
建築学科		実人数	1	3	1	0	5
	内訳	技術	1	0	0	0	1
		工業	1	3	1	0	5
電子情報工学科		実人数	11	5	4	6	26
	内訳	数学(中)	9	4	4	5	22
		数学(高)	9	4	3	5	21
		技術	0	1	0	0	1
		情報	2	0	0	1	3
ロボティクス学科		実人数	10	5	7	2	24
	内訳	数学(中)	8	3	5	1	17
		数学(高)	9	3	6	2	20
		技術	2	1	0	0	3
		工業	2	1	2	0	5
合計	実人数	42	30	22	17	111	

令和元年度 教育実習・介護等体験参加者数

【介護等体験】

(単位：人)

	特別支援学校	社会福祉施設
化学生命工学科	2	2
機械工学科	2	2
情報学科	0	0
建築学科	0	0
電子情報工学科	4	4
ロボティクス学科	5	4
合計	13	12

【教育実習】

(単位：人)

日時	中学校	高等学校	中高一貫校	計
化学生命工学科	2	1	2	5
機械工学科	1	1	1	3
情報学科	0	0	0	0
建築学科	0	0	0	0
電子情報工学科	2	3	1	6
ロボティクス学科	1	1	0	2
合計	6	6	4	16

令和元年度 免許取得者数・教員就職者数

【一括申請による教員免許状取得状況】

(数字は取得人数)

教科・種類		学科						合計
		化学生命工 学科	機械工学科	情報学科	建築学科	電子情報工 学科	ロボティクス 学科	
数学	中学	0	0	0	0	5	1	6
	高校	0	0	0	0	5	2	7
理科	中学	4	0	0	0	0	0	4
	高校	4	0	0	0	0	0	4
技術	中学	0	2	0	0	0	0	2
情報	高校	0	0	0	0	1	0	1
工業	高校	0	3	0	0	0	0	3
合計	中学	4	2	0	0	5	1	12
	高校	4	3	0	0	6	2	15

【教員採用試験合格者・教員就職者数】

(既卒者は含まない)

教科・種類		学科						合計	
		化学生命工 工学科	機械工学科	情報学科	建築学科	電子情報工 工学科	ロボティクス 学科		
数学	中学	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	0	0	0
	高校	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	1	0	1
理科	中学	教採合格	1	0	0	0	0	0	1
		教員就職	3	0	0	0	0	0	3
	高校	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	0	0	0
技術	中学	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	0	0	0
情報	高校	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	0	0	0
工業	高校	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	0	0	0
合計	中学	教採合格	1	0	0	0	0	0	1
		教員就職	3	0	0	0	0	0	3
	高校	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	1	0	1

お知らせ

教職ラボ同好会

→教員を志す近畿大学工学部学生のサークル

活動風景

人前に立つのは苦手…。
でも、はきはき喋れるようになりたい



入会動機は
人それぞれ！

興味はあるけど…。
よくわからないなあ



3年次には近畿大学本部との連携による
教職合宿に参加することも！

活動内容

- ・朗読リレー
- ・自己分析
- ・板書練習
- ・問題解説
- ・模擬授業
- ・教採対策演習
- ・OB講演会
- ・面接練習
- ・議論

それぞれの
強みを伸ばし、
弱点は克服
できるよう
自分たちで考案！

etc…

2020年度活動日

火曜日 18:10-19:40 土曜日 10:00-12:00

※感染症対策のためZoomで活動を実施しました

連絡先: kyoushokulabo.kindai@gmail.com 化学生命工学科 4年 佐古(さこ) まで！

令和3年1月29日 発行

近畿大学工学部教職課程年報 Vol.7

編集兼発行者 近 畿 大 学 工 学 部

〒739-2116 広島県東広島市高屋うめの辺1番

電話 (082)434-7006

Published by: Faculty of Engineering,
Kindai University

Address: 1 Takayaumenobe, Higashihiroshima
Hiroshima 739-2116, Japan
Tel. (082)434-7006

7 Annual Report

2020 Vol.7

CONTENTS

■ Articles [Applied field Research]	
The Impact of Teaching Practice Experience on Teaching Career Aspirations Tomoyuki TAKAYAMA, Kazuya KONISHI	3
■ Notes of the practical experience	17
■ Reports	29
■ Information	35

The Teacher Training Course
in Faculty of Engineering, Kindai University